

松尾芭蕉

1

永遠の旅人

はくたいくわかく

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。
月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。

船頭の人生

対句

を 馬子の人生

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、

昔の西行や杜甫

日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。

毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。（風雅の道に生涯をささげた）昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。

私

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のわたしもいつのころからか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい

が

「笈の小文」明石

あばら家

思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に

こぞ

かうしやう

気持ちが悪くてやまず、（近年はあちこちの）海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに（帰り）

次第に

に

蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、「春立てる霞の空に

かすみ

蜘蛛の古巣を払って（住んでいるうちに）、次第に年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で

を

引用

対句

しらかは

白河の関越えん」と、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、

白河の関を越えたいものだ、そぞろ神が乗り移ってただもうそわそわとさせられ、

道祖神だうそじんの招きにあひて、取るもの手につかず、股引ももひきの破れを
道祖神が招いているようで、なにも手につかないほどに落ち着かず、股
引の破れたところを

を

を

つづり、笠かさの緒付けかへて、三里きりに灸すうるより、

繕い、道中笠のひもを付け替え、三里に灸をすえる（など旅の支度にか
かる）ともう、

日本三景が

江上の破屋

松島まつしまの月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、
松島の月（の美しさはと、そんなこと）がまず気になって、今まで住ん
でいた庵は人に譲り、

の

杉風さんぷうが別墅べつしよに移るに、

杉風の別荘に移ったのだが、

草の戸も住み替はる代ぞ雛ひなの家

（元の草庵にも、新しい住人が越してきて、わたしの住んでいたころ
のわびしさとはうって変わり、華やかに雛人形などを飾っている。）

表八句を庵いはりの柱に懸け置く。

表八句を、（門出の記念に）庵の柱に掛けておいた。

(1) 「おくのほそ道」について答えなさい。

作者 (**松尾芭蕉**) 成立時代 (**江戸**) 時代
ジャンル (**紀行文**) 芸術性の高い (**蕉風**) 俳諧

(2) 書き下し (古典かなづかい↓現代かなづかい) をせよ。

過客 <small>くわかく</small>	(かかく)	行きかふ	(ゆきこう)
とらへて	(とらえて)	迎ふる	(むこうる)
いづれ	(いづれ)	さそはれて	(さそわれて)
思ひ <small>かうしやう</small>	(おもい)	さすらへ	(さすらえ)
江上 <small>しらかは</small>	(こうしょう)	はらひて	(はらいて)
白河 <small>だうそじん</small>	(しらかわ)	くるはせ	(くるわせ)
道祖神	(どうそじん)	あひて	(あいて)
付けかへて	(つけかえて)	灸すうる <small>きうすうる</small>	(きゆうすうる)
まづ	(まず)	別墅 <small>べつしよ</small>	(べつしよ)
住み替はる	(すみかわる)	庵 <small>いはり</small>	(いおり)

(3) 意味を答えよ

百代 <small>はくたい</small>	(永遠)	過客 <small>くわかく</small>	(旅人)
やや	(次第に)	住めるかた	(住んでいた場所)

(4) 当てはまる文を本文から抜き出せ。

永遠の旅人	(百代の過客)
船頭の人生	(舟の上)
馬子の人生	(馬の口)
「李白・杜甫・西行」など芭蕉の尊敬する人	(古人)

(**そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るものにつかず**)

旅の支度 (**股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうる**)

(5) 訳をしなさい

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家 (**元のわびしい草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしさとはうってかわっているなあ。今は華やかにひな人形などを飾っている家になっているよ。**)

2

は 一炊の夢

も

三代の栄耀えいよう一睡のうちにして、大門だいもんの跡は一里こなたにあり。

藤原三代にわたった栄華は一炊の夢のようにはかなく消えたが、今も残る平泉間の南大門の後は、一里ほども手前にあって、往時をしのぶ。

の

が

何より見たい

秀衡ひでひらが跡は田野でんやになりて、金鶏山きんけいざんのみ形を残す。まづ、高館たかだちに登れば、

秀衡の居館跡はすでに田野になっていて、金鶏山だけが形を残している。何をおいてもまず行きたかった高館に登ると、

は

の

北上川きたかみ南部より流るる大河なり。衣川ころもは、和泉いづみが城じやうをめぐりて、

見える北上川は南部より流れる大河である。衣川は和泉の城をぐるりと回って、

高館の下にて大河に落ち入る。泰衡やすひららが旧跡は、衣ころもが関せきを隔てて

高館の下あたりで大河（北上川）に合流する。泰衡たちの屋敷跡は、衣が関をはさんで、

を

高館

南部口をさし固め、夷えぞを防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に何部への出入口を固めて守り、夷を防ぐように見える。それにしても忠義の家来を選んで義経はこの城に

杜甫「春望」

こもり、功名一時の叢くさむらとなる。「国破れて山河あり、城春にしてこもって戦ったが、上げた手柄も一時のことで今はただの草むらになっている。「国が破れても山河があり。城跡は春になって

を

が

草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで泪なみだを落としはべりぬ。草は青くなっている」と笠を敷いて、時が過ぎるまで涙を流していた。

夏草や兵どもが夢の跡
切れ字 **体言止め**

卯の花に兼房見ゆる白毛かな
切れ字

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は
以前から耳にして驚いていた二堂が開帳していた。経堂は三将の像を
残し、光堂は

三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破
(藤原氏)三代の棺を納め、三尊の仏を安置している。七宝は散り失せ
て、宝珠の扉は風でいたみ、

金かねの柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢となるべきを、四面新た
金箔の柱は霜や雪に腐って、とうに壊れて草むらになるところを、
四面を新たに

に囲みて、薨いらかを覆おほひて風雨を凌しのぐ。しばらく千歳せんざいの記念かたみとはなれり。
囲って、屋根で覆って風雨をしのぐ。そのおかげで千年前をしのぶ史跡
になった。

五月雨さみだれの降りがのこしてや 光堂
切れ字 **体言止め**

(1) 書き下し (古典かなづかい→現代かなづかい) をせよ。

栄耀 <small>えいよう</small>	(えいよう)	まづ	(まづ)
和泉 <small>いづみ</small>	(いづみ)	じょう	(じょう)
すぐつて	(すぐつて)	つはもの	(つはもの)
経堂 <small>きやうだう</small>	(きやうだう)	兵 <small>ひかりだう</small>	(ひかりだう)
七宝 <small>しっぽう</small>	(しっぽう)	光堂 <small>ひかりだう</small>	(ひかりだう)
覆 <small>おほ</small> ひて	(おおいて)	霜雪 <small>さうせつ</small>	(そうせつ)

(2) 意味を答えよ

一睡のうち (夢のようにはかなく消えて(「一炊の夢」をふまえ)
 義臣すぐつて (義経が) 忠義の家臣を選びすぐつて
 功名一時の叢となる (功名も一時のことで今は草むらになった)
 時のうつるまで (時が過ぎるのも忘れて

(3) 杜甫の「春望」を意識している部分を抜き出なさい。

(国破れて山河あり、城春にして草青みたり)

(4) それぞれの俳句の季語・季節・句切れと鑑賞を答えなさい。

草の戸も住み替はる代ひなぞ雛ひなの家 季語 (雛) 季節 (春)

鑑賞 (草庵にも、新しい住人が越して、私の住んでいた頃のわび
 しさとはうってかわり、今は華やかにひな人形などを飾る家になった。)

夏草や兵つはものどもが夢の跡 季語 (夏草) 季節 (夏)

鑑賞 (夏草(がぼうぼうと茂っている)よ 武人たちの功名も一
 時ときのはかない夢と消え、今はただ夏草が残るだけだ。)

卯うの花に兼房かねふさ見ゆる白毛しらがかな 季語 (卯の花) 季節 (夏)

鑑賞 (白い) 卯の花を見ていると 兼房が白髪を振り乱して戦
 う悲壮な姿が浮かんでくるなあ

五月雨さみだれの降りのこしてや光堂 季語 (五月雨) 季節 (夏)

鑑賞 (物を朽ちさせる五月雨(梅雨)もここだけは降り残したの
 か 光堂は昔のまま輝いている)